

# 昭和50年の天皇ご訪米に 関する一考察

美 和 信 夫

## 目 次

はじめに

1. 天皇ご訪米の目的
2. ご訪米前の米国民の関心度と日本側の予測
3. 米国におけるご訪米の反響と成果
4. 戦後の米国の対日援助と天皇
5. ご訪米成功の本質的要因

おわりに

## は じ め に

アメリカは太平洋をはさんで日本と相対する国であり、ペリー来航以来歴史的にも日本と密接な国であった。しかし第二次世界大戦では、両国がお互いに最も憎しみあい、戦いあうという不幸な関係となった。そのため、戦後

再びアメリカは日本にとって最も重要で緊密な国とはなったが、日本に対する戦争のわだかまりという後遺症が残っていた。そうしたことから、両国の真の友好親善関係促進のため実現されることになった天皇ご訪米に、アメリカ国民がどういう反応をみせるかに注目もされたし、不安ももたれていた。

またアメリカという国は、多人種から構成されているだけでなく、歴史や文化など種々の点で日本とは非常に異なった伝統を持つ国である。そして建国以来君主制は経験せず、典型的な共和制の国でもある。そうした日本とは異質のアメリカの人々が、日本の歴史・文化・社会を体現するといわれる天皇のご訪米に対して、どういう関心を示すかも注目された。

天皇は昭和46年(1971)にヨーロッパ諸国も訪問されているが、上記のような点から昭和50年(1975)の天皇ご訪米を特に取りあげて考察することにした。

ところで昭和50年9月30日から15日間にわたる天皇・皇后両陛下のご訪米は、予期以上の成果を収め大成功であり、しかもそれは天皇のお人柄によるところが大きかったと報じられた。

そこで本稿は、ご訪米の際の天皇の言動とその反響・反応を具体的に紹介しながら、ご訪米が大成功となった要因、および日本国の象徴であり日本国民統合の象徴である天皇の意義を中心に考察していくことにする。<sup>(1)</sup>

## 1. 天皇ご訪米の目的

ご訪米前の各新聞の社説や特集記事などによれば、天皇ご訪米の目的として特に次の2点が強調されていた。

第1の目的は、日米の友好親善をさらに一層深めるためであるとされた。この目的に関連して、天皇ご訪米が前年のフォード米大統領訪日に対する答礼の意味を持つことと共に、次のような点が指摘された。即ち、日米間は120年の修好の歴史を持つこと、今上天皇は皇太子時代からアメリカ訪問を望んでおられたこと、アメリカは第二次世界大戦後の日本にとって最も重要な国

でありながら、今まで政治的・経済的関係が中心であって、もっと文化的・精神的交流と理解を深め、真の友好関係を築く必要があること、そのために皇室外交の果たす役割が極めて大きいことなどの指摘である。

ところで、羽田空港での出発に際し、天皇はこの目的に関して次のようなお言葉を述べられた。

「.....」

この機会に、米国の実情にふれるとともに、大統領閣下との再会をはじめとして、米国各方面の方々との接触を通じて、日米両国の友好親善が、一層深められることを念願しております。<sup>(2)</sup>

ご訪米の第2の目的は、第二次世界大戦に対する両国民の“わだかまり”という歴史的課題の清算・払拭のためであるとされた。当時アメリカ国民にはまだ「パール・ハーバーを忘れるな」の感情が見られたし、また開戦時と同じ天皇が在位しているということもあって、今上天皇の戦争責任の問題へのこだわりも残っていた。<sup>(3)</sup> ご訪米前の日本の新聞社説でも、戦争責任の問題は「避けて通ることのできない関門」と指摘されていた。その他、広島・長崎に投下された原爆問題も両国民の感情にすっきりしないものを残していた。<sup>(4)</sup>

こうした第二次大戦に対するアメリカ国民の感情的わだかまりを清算・払拭し、一つの区切りをつけるためには、天皇のご訪米とそれともなう日米友好親善のセレモニーをどうしても一度行なう必要があったのである。例えば、天皇帰国時のある新聞社説は、「日米関係の戦後に一つの区切りをつける、という心の重荷を負っての旅でもあった」と指摘している。<sup>(5)</sup>

ともかく、上記のような目的を達するためには、戦後30年たち、時期的にも適切だと判断され、昭和50年秋に天皇ご訪米が実施されたのである。

## 2. ご訪米前の米国民の関心度と日本側の予測

天皇ご訪米前において、アメリカ国民は天皇訪米についてどの程度の関心を持ち、また日本や天皇についてどのような点に関心を示していたのである

うか。また日本側の関係者などは、ご訪米前にどのような予測をしていたのであろうか。本節ではご訪米前のこうした状況を概観しておく。

まずご訪米前におけるアメリカ国民の日本や天皇についての関心の程度とその内容をみてみよう。ご訪米の1ヶ月から半月前のこの点に関する取材結果が、新聞・雑誌の特集記事などの中で報告されていた。またご訪米に関する何人かのアメリカ人の見解や予測もみられた。その内容のいくつかを以下に紹介する。

(1) 雑誌『諸君』の昭和50年11月号に、「日本の天皇をどう見るか〈全米市民面接調査〉」のテーマで、ご訪米の約1ヶ月前に取材した結果が掲載されている。<sup>(7)</sup>

その中で最初に紹介しているニュージャージー州フォート・リーの製薬会社役員(43才)は、取材した記者に次のように答えている。

「天皇って？ 国王と同じなのか？ 日本にはまだ国王がいたのか。アメリカを訪問すること？ 知りませんね。」

上記は一例であるが、こうした取材結果を紹介した最後に、取材にあたった記者が次のように取材のまとめを報告している。

- ① アメリカ人の多くが「日本の天皇」の訪米を知らないこと。
- ② そして面接のさい、訪米をはじめて知った人々が、その後も「日本の天皇」について殆ど関心を示さなかったこと、「ノー・コメント」が多かったことは、たかだか百余名の調査ではあっても、注目に値すると考えられること。
- ③ それにしても「日本の天皇」「天皇訪米」について示した、アメリカの人々の冷淡さは驚くばかりだったこと。
- ④ ささやかな調査の結論は、アメリカ国民の天皇に対する関心は、ごく低いものになっていること。<sup>(8)</sup>

(2) 『サンケイ新聞』の特集記事「天皇と日本人とアメリカ人」<sup>(6)</sup>の中で、ご訪米の約半月前にニューヨーク市内コロンビア大学生7人に面接した結果が報告されている。それによれば、日本或いは日本人という言葉から連想

する単語は、「電子工業」、具体的な日本製品名、「抜け目のない経営」「高い品質、安い値段、安い賃金」「適応力」「調和」など、経済面に集中していること、また天皇訪米を知っていたのは7人中2人に過ぎないことなどが報告されているとともに、取材を担当した記者は天皇ご訪米について「この日現在、米国東部のジャーナリズムでは“天皇ご訪米”はほとんど話題になっておらず、一般にはまず知られていない」という結論を報じている。

(3) 『読売新聞』には、ご訪米の約半月前の取材結果が次のように報告されている。

「9月中旬の3日間、記者が(ニューヨークで)無差別にインタビューした24人は、いずれも天皇訪米を「知らない」と答えた。もちろん、天皇のお名前「ヒロヒト」を知っている人はいなかった」<sup>(9)</sup>

(4) 『朝日新聞』には、ご訪米の約半月前の取材結果が次のように報告されている。

「(ニューヨークの)「町の人々」の視野に映る陛下のご訪米は入れ代わり立ち代わり姿を現す世界各国のVIPの「ワン・オブ・ゼム(1人)」にすぎないということらしい」<sup>(10)</sup>

(5) 同志社大学教授オーテス・ケーリ氏は、ご訪米直前に、アメリカ人の関心度を次のように述べている。

「日本人が「天皇訪米」を重大視するほどには米国人はこの訪問を意義深いものとは思っていない」<sup>(11)</sup>

(6) アメリカの世論調査の機関として有名なハリス社の幹部カーミット・ラズナー氏は、やはりご訪米前に、その年に行われた未公開の調査記録などにに基づき、次のように指摘している。

「米国民の圧倒的多数は、日本を極めて重要な同盟国だと考えており、きわだった不信や敵意は見当たらない。が、天皇陛下のご訪米にはほとんど関心を示していない」<sup>(12)</sup>

以上のような取材報告やアメリカ人の見解などから、日本や天皇に対する

ご訪米前のアメリカ国民の関心度について、次の2点に要約することができよう。

- ① 1ヶ月以内に迫っても、アメリカのジャーナリズム内では天皇ご訪米はほとんど話題になっておらず、ましてや一般のアメリカ人は天皇訪米をほとんど知らないし、関心も持っていない。
- ② アメリカ国民の日本に対する関心は経済面に集中しており、その他にはほとんど関心がないし、知らない。

次に、日本側の関係者などは、天皇ご訪米をどのように予測していたのかを見てみよう。随行した入江侍従長は、帰国後に書いた自伝の中で、ご訪米前の心境を次のように述べている。

「アメリカご訪問も、前景気はあまりぱっとしなかった。……とにかく、アメリカは太平洋戦争の、当の相手国である。戦後は、どの国とよりも緊密に結びつけてはいても、戦争の後遺症は、一体どんなことになっているものか。かなりの不安と、かなりの危懼を抱いて出かけたものである」

また、ご訪米中報道担当大使を勤めた藤山樞一氏は、帰国後の記事の中ではあるが、ご訪米前の気持ちを次のように述べている。

「報道担当の随員として、最も心配であったのは、年間に20～30人の元首級の訪米になれているアメリカのマス・メディアが、今回の両陛下のご訪米をあまり大きく取り扱わないとしても不思議ではないし、報道の内容についても、戦争のわだかまりから必ずしも好意的でないものもあろうという点であった」

もっとも、藤山氏は、上記のような気持ちを抱きながらも、それ迄の体験から、天皇の誠実なお人柄を目のあたりにした人々には、従来の先入観が打破され、必ず好感をもって迎えられるであろうという予想もしていたと述べている。

このように、日本側の関係者には、ご訪米前にかかなりの不安もあったことがうかがわれる。ご訪米より4年前の昭和46年に行なわれた天皇・皇后両陛下ご訪欧の折に、第二次大戦で敵対した国では戦争のわだかまりがまだ残っ

ていて、非好意的言動が見られたことからも、そうした関係者の不安も無理もないことであったと考えられる。

ところで、各新聞の社説では、諸々の懸念はあるものの、ご訪米が実施されれば次第にアメリカ国民の関心が高まるとともに、「天皇のお人柄」がきっとアメリカ国民にも通じ、ご訪米の所期の目的を達して充分成果をあげられるものという予想を、ほぼ共通して書いていた。例えば、ご出発当日の『読売新聞』社説は、次のように書いている。

「……神秘的のベールに閉ざされていた“人間天皇”の素顔が米市民に深く印象づけられるに違いない。……両陛下の誠実なお人柄は、一般の外交活動を補って余りある親善の効果をあげるだろう」

### 3. 米国におけるご訪米の反響と成果

最初に結論を述べれば、日本の各新聞が報じたように、天皇ご訪米は予期以上の成果を収め、大成功であった。もっとも、一部ではご訪米が日米の政治的演出であるという指摘もあったが、以下で述べるように、天皇ご訪米では、そうした政治的次元を越えた大きな反響と成果が認められる。

ニューヨーク・タイムズ紙には、それまで日米首脳会談のニュースでも一面に出たことはまずなかったが、天皇訪米は6日間写真入りのトップ記事で掲載された。このように、天皇がアメリカに到着され、アメリカ人が天皇を目のあたりにするようになってから、全米で日を追って天皇ご訪米への歓迎が盛り上がり、大成功となったのである。駐日大使ホドソン氏は、そうした全米の雰囲気、随行の藤山大使にあきれ顔で次のように述べたという。

「新聞もさることながら、テレビ、ラジオの放送量も空前ではないか。また、少しぐらい悪意のある記事はないかと思って注意していたが、一つも見当たらない」

また、エドワード・ケネディ上院議員は、天皇ご訪米を次のように評した。

「大成功だったご訪米は、両国の友好関係の強固さをビビッドに描き出した。60年代後半から70年代初めに一時的に生じた両国間のわだかまりが、ご訪米で完全にぬぐい去られた。両陛下は米国民の示した歓迎ぶりを額面通り受け取ってほしい」

また、ワシントンにあるスミソニアン研究所に当時留学中であったため、天皇ご訪米を直接見聞できたという京都産業大学教授若泉敬氏は、「素晴らしい大成功であった」と最大級の評価を下している。さらにやはり当時訪米中であった評論家江藤淳氏も、「結果的にいうと、これは異例な大成功だったという印象ですね」と評した。

以上のように、天皇ご訪米は大成功であった。そこで、第1節で指摘したご訪米の目的がどのように達せられたのかを考察しながら、大成功と評価された所以をもっと具体的に検討してみよう。

まずご訪米の第1の目的は日米の友好親善の進展、特に両国の文化的・精神的交流と理解を深め、より善い友好関係を築くためとされた。こうしたアメリカとの友好親善に皇室外交の果す役割が大きいことは、天皇ご訪米直前における次のようなアメリカ人の天皇観からも首肯できよう。

- (1) 「日本がきわめてホモジニアスな国であること、平和な国であることなどを感じています。日本のそうした状態は、すべて天皇の存在に負っている、と私は思っています」(上院議員のスタッフで、来日したこともあるエドワード・ケニイ氏(50才)の談)。
- (2) 「米国民が天皇を通じて日本をみようとしていることも確かだ。知日派が指摘するように、戦後の日本には、日本を感じさせる「個性」がなかった。政治から離れた天皇に、米国民が政治指導者としてのイメージを抱いているわけではないが、天皇をもっとも日本的な“代表的日本人”として受け取っている」(毎日新聞特派員の報告)。
- (3) 「ウォーターゲート事件を経験した米国人としては、政治と切り離された“道徳的リーダー”ともいうべき皇室を持つ日本やヨーロッパが、実はうらやましく思っており、あこがれさえ持っている」(同志社大学教授オ

ーテス・ケーリ氏)

- (4) 「天皇を知ることとは日本を知ることだ」(タイム・マガジン紙東京支局長のウィリアム・スチュアート氏(38才))
  - (5) 「ヒロヒトは日本社会を体現する存在、日本人の貴重な民族的遺産の保管者であったし、現在もそうである。天皇制存続の決定によって誇りと自信を取り戻した日本人は、その傷ついた民族精神を立て直すことができた」(ニューヨーク・タイムズ紙社説の要旨)
- さらに、ご訪米後には次のようなアメリカ人の反響や見解が見られた。
- (1) 「天皇のご訪米で初めて日本そのもののアイデンティティ(人格)を見つけた感じがした。日本全体の姿がわかったという感じだね」(シカゴ・デーリー・ニューズ紙の編集担当副社長ダッドマン氏)
  - (2) 「天皇が示された謙譲さ、穏かな物腰は、平均的な米国人に好感を持って迎えられたようだ。一般的に米国人はまだまだ日本を深く理解していないので、天皇訪米は、日本のイメージアップと両国の文化関係強化に役立つと思う」(エール大学教授ビュー・パトリック氏、極東経済論専攻)
  - (3) 「それに天皇を実際に自分の目で見たことのない人間には、日本の天皇制というのは、非常にわかりにくいわけですね。今日の日本の天皇制がどんなものかというのは、やはり、百聞は一見にしかずと言いますが、天皇を実際に見ると違いますね。4年前に、天皇、皇后がヨーロッパに行かれて、こんどはアメリカを訪問された。本当に天皇は、日本を代表している人間なわけです。日本はいろいろと工業製品では海外に広く知られているわけですが、日本の文化についてはあまり知られてない。天皇が行かれると、日本は古い国で、非常に豊かな文化を持っている——天皇がそれを代表しているわけです。たとえば三木首相がアメリカへ行く、あるいは、佐藤、田中前首相たちがアメリカへ行ったときでも、何か性格がない、顔がない人たちがなわけです。ですから、面白味もないし、無性格なんです。

やはり、天皇は、日本という国を代表するにきわめてふさわしい人間で

あると、私は思います。そして天皇を見ることによって、日本の国への尊敬の念が湧くということが言えるでしょう。最近、アメリカにきた国王たちをあげても、たとえばエリザベス女王ですとか、イランの皇帝がきましたけれども、天皇ほど注目を浴びなかったでしょう。そして天皇ほど強い印象を残さなかったでしょう」(アメリカABC放送の特派員クレイグ・スペンス氏)<sup>69</sup>

以上のような見解や反響から、アメリカ人が天皇を通して「日本」、特に「日本の伝統・文化・道義」の理解を深めようとしていることが分る。そしてそうした日本への理解と、それにとまなう日米の友好親善の進展が、何よりも天皇の人格に負うところが大きいという指摘も注目される。天皇ご訪米は日米の友好親善の進展に多大な成果をもたらし、極めて有意義であったことを示している。

次にご訪米の第2の目的は、天皇の戦争責任の問題を含めた第二次世界大戦に対するアメリカ国民の“わだかまり”の清算・払拭にあった。この点も帰国された時の新聞の見出しに、「“戦争の清算”を実現」「歴史に区切りをつけ」などと報じられているように、大きな成果をもたらしたと考えられる。<sup>69</sup>

それではこのように高く評価された所以を、若泉敬氏の指摘にもとづいて、論理的な面と感情的な面の両面から考察しよう。

まず論理的な面からみる。天皇は、ご訪米前に、アメリカの新聞・テレビの記者達と前後6回にわたって会見をされたが、それが大きな効果をもたらしたという。即ち、若泉氏の指摘によれば、多くのアメリカ人は、日本の天皇が絶対君主に近い存在で、オールマイティの権限を持っていて、全部を自分で決めると誤解していたが、この会見における天皇の返答で、戦争当時の立憲君主としての天皇の立場が、アメリカ人に論理的に十分理解され、その点での論理的説明はピリオドを打ったという。この時の会見では、例えば次のような質問と返答も行なわれている。

「(記者の質問) 陛下が戦争の終結に重要な役割を果たされたことは、よく知られています。一方、日本が戦争へ突入する結果をもたらした意思

決定過程にも、陛下は参加されたと主張する人々に対しては、どうお答えになられますか。

(陛下のお答え) 戦争終結時には私は独自の決断をいたしました。それは総理が閣議で合意を取りつけることに失敗し、私の意見を求めたからです。従って私は、自分の意見を述べ、その通りの決断を下したのです。開戦時には閣議が決定を下したので、私はこの決定を覆すことはできませんでした。これは日本国憲法に従ったものです<sup>68</sup>」

「(記者の質問) 真珠湾攻撃開始のどのくらい前に、陛下は攻撃計画をお知りになりましたか。そしてその計画を承認なさいましたか。

(陛下のお答え) 私が軍事作戦に関する情報を事前に受けていたことは事実です。しかし私はそれらの報告を、軍司令部首脳たちが細部まで決定した後に受けていただけなのです。政治的性格の問題や、軍司令部に関する問題については、私は憲法の規定に従って行動したと信じています<sup>68</sup>」

上記の内容からも分るように、要するに、天皇は常に憲法の条項に従い立憲君主としての立場を貫いてきたと述べておられる。しかもアメリカ人記者が率直に質問したために、かえって戦争中の天皇の立場が明確に伝えられ、天皇を迎えるアメリカ国民に好結果をもたらしたと考えられる。その点の例を紹介しよう。ロサンゼルス市長主催午さん会で、随員の藤山大使の隣席にいた同市の某有力者は、「ロサンゼルス・タイムズ紙上に大きく報道された陛下のご会見の記事で、同市民の感情は一転し、もう過去の事は語るまいとの空気になってしまった」と、しみじみとした口調で語っていたという。<sup>69</sup>

次に感情面からみる。即ち、太平洋戦争の宣戦布告にしても、形式的には天皇の「御名御璽」によって出ており、その本人が訪米すれば、やはり感情的にすっきりしないものを抱くのは当然と考えられる。しかも、この感情的わだかまりは、天皇ご自身が米国へ行ってから何らかの言動をされない<sup>69</sup>と解決できない性質のものであったと考えられる。従ってご訪米中に戦争の問題に触れないわけにはいかなかったのである。<sup>69</sup>

第二次大戦に対するアメリカ国民の感情的わだかまりが、天皇ご訪米によ

って清算されるであろうという予測は、アメリカ人の方でも抱いていたようである。例えば、テネシー州メンフィスのプレス・ソリター紙のレイ論説委員は、取材に当たった日本人記者に、フィリピンで戦死したおじのことを話し、ついで「きっとこんどのご訪米は“真珠湾時代”の終わりを、わたしたちの年代の米国市民に告げることになるでしょう」と語ったという<sup>43</sup>。

この感情的わだかまりを清算・払拭したのみならず、アメリカ国民の心をとらえた最高の場面は、ホワイトハウスの公式歓迎晩さん会における天皇のお言葉であった。その時のお言葉は次の通りである。

「……………」

私は多年、貴国訪問を念願にしておりましたが、もしそのことがかなえられた時には、次のことをぜひ貴国民にお伝えしたいと思っておりました。と申しますのは、私が深く悲しみとする、あの不幸な戦争の直後、貴国が、わが国の再建のために、温かい好意と援助の手をさしのべられたことに対し、貴国民に直接感謝の言葉を申し述べることでありました。當時を知らない新しい世代が、今日、日米それぞれの社会において過半数を占めようとしております。しかし、たとえ今後、時代は移り変わろうとも、この貴国民の寛容と善意とは、日本国民の間に、永く語り継がれて行くものと信じます。……………」<sup>43</sup>

天皇は、上記のようなお言葉で、戦争問題にも言及された。それに対してニューヨーク・タイムズ紙は、「陛下の訪米によって戦争に終止符が打たれた」という趣旨の社説をかかげ、タイム誌は「個人的には戦争後遺症は残っているかも知れぬが、日米の国家関係においては全く消滅した」と報道したという<sup>44</sup>。またこの翌晩に行なわれた陛下のお返し晩さん会のあとで、CBSの名解説者クロンカイト氏が、随員の藤山大使の両手を握りながら、「これで戦後の日米関係は終わった。これからは将来の日米関係だ」と感想を述べたという<sup>45</sup>。こうした報道や感想からも、戦争に対するアメリカ国民の感情的わだかまりを清算・払拭し、日米関係の歴史に一つの区切りをつける上で、天皇のお言葉を中心とする公式行事が大きな効果のあったことを示している。

ところで、上記のお言葉の中で、天皇が戦後のアメリカの対日援助に対する感謝を表明されている点が特に注目される。即ち、この点が天皇のお言葉の核心であり、実は天皇ご自身ではご訪米の最大なる目的とされていたことが分る。しかも「この貴国民の寛容と善意とは、日本国民の間に、永く語り継がれていくものと信じます」と述べられたのである。ご訪米前の新聞等は、この点にあまり注目せず、ご訪米の目的として大きく取りあげていなかったようである<sup>46</sup>。しかし、以下で紹介するように、この援助への感謝の気持ちを中核とするお言葉によって、予期以上の反響と成果をもたらすことになったのである。

このお言葉について、若泉敬、江藤淳の両氏はともに、「心の琴線に触れた名スピーチ」と評したが、当のアメリカ国民の反響がどのようであったのか、以下に紹介しよう。

- (1) ニューヨーク・タイムズ紙の見出しは「ヒロヒトは第二次大戦をかなしみ、戦後の米国の援助に感謝している」と、ワシントン・ポスト紙の見出しは「天皇は戦後の米国の援助をたたえた」と報じた<sup>48</sup>。
- (2) 「大変感動的スピーチであった。大使もご存知のように、この部屋には世界各国から元首とか総理大臣とか何人も毎年おいでになる。これまでいろいろな席に出たけれども、今日のような素晴らしい感動的なスピーチは聞いたことがない」(キッソングャー米國務長官が安川駐米大使へ述べた感想<sup>49</sup>)
- (3) 「戦争について述べられたお言葉も適切であったけれども、それ以上によかったのは、陛下がご自身の気持として、アメリカ国民に感謝のお言葉を述べてくださったことだ。これはアメリカ国民に大きな影響を与えるでしょう」(アメリカの代表的新聞記者で、ニューヨーク・タイムズ紙の副社長もつとめたこともある、ジェームズ・レストン氏の感想<sup>50</sup>)
- (4) 「驚いた、あんなことを言われるとは全然考えてもいなかった。実はわれわれは戦後、みんな困っているというので、よかれと欲しているんなくに援助の手を差し伸べた。ところがほとんどの国が、まだ足らんからもっ

とよこせとか、配分がなっていない、とかいう不平不満はあっても、心から感謝などしてくれたことをあまり聞いた記憶がない。日本にはそれほど援助した覚えがないので、日本が立ち直ったというのは日本国民が優秀で勤勉で、資源も何もない国がすごい経済・技術大国になって、日本国民というのは大した国民だなあと感心していた。ところが、その国のいちばん偉い方がおいでになって正面から本当に有難うと、とっくに忘れていたことを感謝された。しかも、これからも永く忘れませんよといわれた。ああ我々もやっぱりいいことをしていたんだ、しておいてよかったなあ、という気持ちで本当に嬉しかった」(あるアメリカ人が若泉敬氏に述べた感想)<sup>50</sup>

以上のような反響や感想からみても、天皇のお言葉がアメリカ国民の心を深くとらえた感動的な内容であったことが充分認められる。<sup>51</sup>

ところで、このような大きな反響を呼んだ要因として、次のようなアメリカ側の背景も考えられる。まず上記(4)で示した感想にもみられるように、戦後の各国への援助とその反応に対するアメリカ国民の不満である。即ち、戦後アメリカは西欧や日本などの国々に多くの援助を行なった。しかし西欧などでも素直に感謝されているとは思えないし、なかには反米運動さえ起きている国もあった。そのことにアメリカ人の多くは不満であったという。<sup>52</sup>それが天皇のお言葉によって初めて正面からアメリカ国民は感謝されたのである。

また、もっと大きな背景として、当時のアメリカ国民のアジア政策への懐疑、挫折感を若泉敬氏が指摘している。即ち、第二次大戦後アメリカは、それが善事だと確信してアジア問題に積極的に介入した。しかしそれらが必ずしもうまくはいかなかった。例えば、中国の国共内戦への加担と失敗、朝鮮戦争への介入などもある。が、最大なるものは何と云ってもベトナム問題であった。そして天皇ご訪米の約半年前の1975年(昭和50年)4月にアメリカが力をいれた南ベトナム政府が崩壊したため、ご訪米時にはそれにとまなうアメリカ国民の挫折感・無力感が強くみられ、なかにはアジアから一切手を引こうという意見まで出ていたという。そうした中で、アメリカのアジア政策が必ずしも失敗ではなかったという証拠となっていたのが、戦後見事に立

ち直った自由主義国で同盟国の日本という存在であったという。そしてその日本から一番偉い方が訪米されるというので、政府関係者を中心に丁寧に迎えようという気持ちが強かったという。しかも当時の日米間には、その前後にみられた経済摩擦などの問題は何もなく、その点でも実にタイミングの良い絶好の時期でもあった。<sup>53</sup>

天皇のお言葉がアメリカ国民の心を深くとらえ、感動させた要因として、上記のような背景も認められよう。しかしそれより重要でより本質的な要因は、若泉氏も指摘しているように、お言葉にあふれた天皇の誠実なお人柄にあったと考えられる。そこで、天皇が援助への感謝のお言葉を述べられた背景をさらに検討し、誠実なお人柄と評される所以をより具体的に考えていきたい。

#### 4. 戦後の米国の対日援助と天皇

歓迎晩さん会のお言葉から、天皇ご自身としては、ご訪米の目的が、戦争問題もさることながら、何よりも敗戦後の米国の援助に対する感謝の気持ちをアメリカ国民に直接伝えることにあったことが分る。つまり単に日米の友好親善というあいまいな目的ではなく、もっと明確な目的を天皇ご自身は持っておられたのである。ご訪米前の新聞などはその点にあまり注目していなかったが、ご訪米前の天皇の発言をふりかえると、その点が充分よみとれる。例えば、ご訪米約1ヶ月前の宮内庁記者との会見において、天皇は次のように述べておられる。

「(わが国が今日のような繁栄を迎えようとは)終戦当時は考えませんでした。このような繁栄をきたしたことは、政府の良い施策と国民の努力がありました。その裏面には米国民政府、米国民の絶大な支援があったことを感謝しています」<sup>54</sup>

また、ご訪米中の日程編成にあたる宮内庁の側近に、次のように述べられたという。



「わたくしは戦後の日本をここまで援助してくれた米国政府、それに理解を示してくれた多くの米国民に感謝のことばを述べに行くのだ。だから、わたくしの趣味（生物の研究）や日系人に会いにだけ行くのではない」

こうした天皇のアメリカに対する格別の気持ちとご訪米に対する並々ならぬ決意をさらに深く理解するためには、敗戦後の日本に対するアメリカの援助の様子とそれに対する天皇ご自身のかかわりなどを考察しておく必要がある。

敗戦直後の日本が抱えた大問題の一つが大変な食糧難に陥っていたことであつた。昭和54年8月に公表された外交記録とそれを報道した各新聞は、あらためてその様子を生々しく伝えている。それによれば、およそ次のような状況であつたという。昭和20年秋の米の収穫量は、平年作の6割という46年ぶりの大凶作が予想された。その上外地からの引き揚げ、復員軍人などの急激な人口増を抱えて、1000万人餓死説とこれともなう治安の動揺が真剣に憂慮された。日本人がともかく生きていくためには、農家から徹底した供出を実施してもなお300万トンの食糧が不足するとされた。それで政府は、昭和20年9月以降具体的な数字を示して、連合軍総司令部（GHQ）に食糧輸入を懇請するなど、敗戦という条件のなかで、食わんがための努力をつづけた。だが、12月に入ってもGHQ側からは食糧についての回答がなく、政府のあせりの色は濃くなった。実は当時の食糧不足は何も日本だけに限らない問題であつた。欧州やアジア諸国も働き手は戦場に出て、農地は荒れていたうえ、1945年（昭和20）は世界的大凶作であり、そのため世界的食糧不足の穴埋めが、すべてアメリカに殺到したから、米政府も日本のことだけを考へてはいられない事情があつた。しかも当時GHQとの折衝を担当した人の証言によれば、アメリカでは「議会などが納税者向きに、敗戦国のため多額な出費をすることにいい顔をせず、政府もそうした空気が、他の連合国の意向などを反映して対日食糧輸出に厳しい態度をとっていた」という。公表された『食糧輸入日報』の昭和21年6月4日条によれば、「日本への食糧供給は世界世論の制約を受け、最後尾順位に置かれている」と慨嘆している。

ところで天皇が、昭和20年9月27日の第1回マッカーサー元帥との会見の席上で、戦争の全責任をご一身で負う旨を申し出られたことは有名であるが、その時さらに「この上は、どうか国民が生活に困らぬよう、連合国の援助をお願いしたい」と申し伝えられたという。そして上記のように、政府の尽力にもかかわらず食糧援助についてのGHQの回答のない中で、さらに次のような天皇の申し出が伝えられている。昭和20年12月10日、天皇陛下は宮中に松村農相を呼ばれ、「戦争で塗炭の苦しみを受けた国民に、このうえ餓死者を出すことは自分には耐え難い。政府の要請にアメリカは食糧を与えてくれないというが、考えれば当方に代償として提供すべき何物もないのだから、いたしかたがない。それで、聞けば皇室の御物の中には国際的価値のあるものが相当にあるとのことだから、これを代償としてアメリカに渡し、食糧に代えて国民の飢餓を一日でもしのぐようにしたい」と帝室博物館の館長に命じてつくられた皇室御物の目録を渡された、という。農相はこれを幣原首相に渡し、幣原首相がマッカーサー元帥にその旨を伝えたところ元帥は感動して、「天皇のお考えはよくわかるが、自分としてもアメリカとしても、皇室の御物を取り上げてその代償に食糧を提供するなどには面目にかけてもできない。しかし国民を思われる天皇のお気持ちは十分に了解したので、私が責任を持って必ず本国から食糧を輸入する方法を講じる」と答え、目録を返し、それから緊急食糧の日本あて放出を本国に求めて動き出したという。

昭和21年5月頃にマッカーサー元帥が本国政府に「食糧を送るか兵隊を送ってほしい。もし急いで送ってくれなければ、両方とも送ってもらわなければならない」と強硬な電報を打って、本国政府を突き上げたという事実が明らかになっている。そこには、上記のような天皇のご努力が影響しているものと考えられる。そして昭和21年7月から8月にかけて輸入食糧の大放出が実現した。外交記録は、この時始まった米国からの食糧援助が日本国民にとってまさしく「救いの神」であつたことを伝えている。こうして食糧問題について日本関係者が一息ついた頃の昭和21年10月16日に行なわれた第3回の日皇とマ元帥との会見の極秘記録の内容が、昭和50年8月15日の『サンケイ

新聞』に掲載された。<sup>65</sup> それによれば、会見内容の多くが食糧問題となっていて、その中で天皇はマ元帥に、例えば次のように述べておられる。

「陛下： 去る5月には食糧事情最悪の状態にあり、……一つの危機が到来したのでありますが、幸ひにも貴將軍の理解ある御援助により之を切り抜け得た事は誠に感謝に堪へません」

「陛下： 日本其他への食糧輸出に依り米国民の食糧事情も以前の様には楽ではない由であります、それにも拘らず、日本に輸出を続けられる貴国民に対しても厚く感謝の意を表し度いと存じます。

好い機会がありましたならば、又貴將軍が御賛成でありますれば、その旨米国民に御伝へ願ひます」

以上のように、敗戦後天皇は食糧援助を得るために尽力されただけに、援助をしてくれたアメリカに対する感謝の気持ちを強く抱いておられた。上記のマ元帥に対するお言葉にもそれがあらわれているが、その後も機会あるごとに、アメリカの関係者へその気持ちを伝えておられる。例えば、昭和22年5月19日に、天皇は米国アジア救済団体駐日代表3名にお会いになり、日本への援助に対する感謝を述べられた。<sup>66</sup> また昭和46年9月に、天皇はご訪欧の途中アンカレッジ空港でニクソン大統領の出迎えを受けた際、戦後のアメリカの援助を感謝するお言葉を述べておられる。<sup>67</sup>

なお天皇のご訪米に対する並々ならぬ気持ちの背景として、このような援助問題だけでなく、終戦時に軍部らがポツダム宣言受諾に反対した中で、天皇が敵国アメリカ等連合国を信じてポツダム宣言受諾の断を下された事情も考慮すべきであるという指摘がある。即ち、昭和20年8月9日の御前会議でポツダム宣言受諾に賛成する旨の「ご聖断」が下り、これにもとづいて政府はポツダム宣言を受諾し戦争を終結することを連合国に通告したが、その際政府は国体（天皇制）護持という条件だけをつけた。これに対し連合国を代表して米国は、「日本政府の最終形態は、日本国民の自由に表明する意思によって決定されるものとする」と回答してきた。それで軍部らはこの回答では「国体を否定するものであり、国体を護持できない」として再びポツダム

宣言を断固拒否する態度をとった。<sup>68</sup> そこで8月14日に再び御前会議が開かれ、天皇は再び終戦への「ご聖断」を下されたのである。この時の事情について、終戦時の内閣の一員であった迫水久常氏は、ご訪米前に当時を回想しながら「あれが終戦をめぐる最大の難局だった。しかし、陛下は『先方の答えは決して悪意で申しておるのではないと思う。あれでよい』といわれ、すべては決った」と述べている。<sup>69</sup> この指摘は、8月14日の御前会議におけるいわゆる「ご聖断」の中で、次のように述べておられる部分からも首肯できよう。

「……国体問題についていろいろ疑義があるとのことであるが、私はこの回答文の文意を通じて、先方は相当好意を持っているものと解釈する。先方の態度に一抹の不安があるというのも一応はもっともだが、私はそう疑いたくない。<sup>70</sup>……」

そして迫水氏は、当時の天皇の気持ちについて、さらに次のように指摘している。即ち「『信を敵の腹中におく』という言葉があるが、あときの陛下のお気持ちは、まさにそれだったと思う。アメリカを信じてみよう。それしか、国民をこれ以上の苦しみから救う道はない、というご決意だった」。だから、天皇が米国に対して抱いておられる感情は、現実の対日政策の具体的な内容にあるのではなく、ただ一点、「自分の信は裏切られなかった」という思いにあるのではないかと、迫水氏は述べている。

この迫水氏の指摘は、上記「ご聖断」のお言葉からみても、ご訪米に対する天皇の気持ちの背景として、確かに考慮すべきであろうと考える。

## 5. ご訪米成功の本質的要因

前節で考察したような歴史的背景をもった天皇のお言葉は、アメリカ国民に、本当に心からの感謝の言葉として感銘を与えるとともに、天皇の誠実なお人柄がより生き生きとした姿で認識されることになったものと考えられる。つまり、ご訪米成功の本質的要因は、このお言葉に代表されるような天皇の誠

実なお人柄にあったものとする。この点は日本の各新聞とも異口同音に認めた。一例として、『朝日新聞』の社説における次のような評価を紹介しよう。

「太平洋戦争の時期を除いて、米国民が日本に対する関心をこんどほどに高めたことはあるまい。天皇、皇后お二人は、日米友好関係を両国民相互の理解と関心の上に据え直す外交使節の役を果たされた。

それは、天皇、皇后のお人柄が米国民に与えた好ましい印象によるところが大きかったといえよう」

またアメリカ側からも、ハーバード大学のライシャワー教授が、同じく天皇のお人柄の力を次のように指摘している。

「われわれの時代はスポーツや大衆娯楽の若いスター、あるいは大きな政治、経済力を持つ円熟した英雄がもてはやされる時代だ。個人的な権力を何も持たない年老いたカップルにとって、世間の関心を引き、感嘆させることは容易なことではない。が、両陛下はそれを大いにやってのけられたのである。……こうした直接的なふれ合いが、両陛下と直接お会いすることができたアメリカ人に強い印象を与え、両陛下がまさに温い、魅力的なお人であり、単なる畏敬すべき“象徴”ではないという気持ちを広く抱かせた。……今回の「訪米成功」は大部分、天皇、皇后両陛下ご自身に帰するといわなければならない」

さらにウィッケル米國務省東アジア太平洋広報担当官は、同様な観点から次のように指摘している。

「アメリカ人は、尊敬を保ちながらも飾り気のない天皇のお人柄にたいそう魅力を感じた。演出もリップサービスもなく、それでいて人を引きつけるものをお持ちだ。いわゆる君主というイメージとは異質のものです。かねて、天皇は神格化されたものという印象を抱いていただけに、直接お会いして一層敬愛の気持ちを強く感じた」

上記のような印象、感想は多くのアメリカ人に共通したものであろう。そしてご訪米前には極めて低かったアメリカ国民の天皇への関心が、天皇がア

メリカに到着され、天皇の姿を目のあたりにしてから、日に日に高まっていたことにも、天皇のお人柄によるアメリカ国民への影響力の大きさを証明していると考えられる。例えば、こうしたアメリカ国民の変化を日本のある新聞記者は、次のように報告している。

「米国ジャーナリストの感覚としては、まず両陛下の米国ご到着ないし直後には、天皇のお名前からすぐ戦争を連想し「戦争中の元首が訪米する」という観点から取り上げるものがほとんどだった。ところが、ご日程が進むにつれてそれまで米国人の目には“神秘のベール”に包まれていた天皇陛下のお人柄が現実には極めて親しみ深いものであることに気づき、その後は日米親善の観点に立ち、正面から取り上げるようになった、というのが真相だろう」

また随員であった入江侍従長は、天皇を目のあたりにしたアメリカ人の印象、感想を次のように伝えている。

「あとから聞いた話であるが、アメリカの第1歩である、ウィリアムズバーグの空港にも、シカゴ郊外のバルツ農場にも、陛下を、太平洋戦争の仕掛け人と考えて、恨みをこめて、にらみつけてやろうと思って、出ている人があった。ところがそれらは皆、陛下のお姿を見て、これはあの戦争には無関係の人であると思ったという。

飛行機のクラップを、胸を張って、ヒットラーのような人物が降りてくるにちがいないと思った。ところが全然異質の、あるいは正反対の挙措に、驚き入った。そして等しく、この気のよさそうな、やさしげなおじいさんは、戦争とは全く無縁の人である、と。

この印象や感想は、アメリカ人のすべてに共通であったらしく、それがころがりころがって、大歓迎の空気を盛り上げた」

しかも天皇のお人柄が、ご訪米中のみならず、その後も長くアメリカ国民の心に好印象を残したという。

以上のようなアメリカ人の印象、感想からみても、天皇のお人柄がご訪米成功の本質的要因であったこと、天皇の存在意義がアメリカ人にも十分理解

されたことなどの点を認めることができよう。

次にご訪米中の天皇の姿は日本国民にも多大の感銘を与え、天皇の存在意義を再認識させた。「かつて、日本の新聞がこれほど親米的なフノイキをふりまいたことがあろうか」と、ある日本通の英人記者が感嘆したというが、日本のマスコミは、「尽忠奉公型」の報道と評されるほど、天皇ご訪米を大々的に報道してやまなかった。そうした中で、特に天皇のお人柄を高く評価したこと、天皇の重要性を人々に再認識させたことなどが注目される。例えば、天皇のお人柄の影響に関して、同行取材した記者が次のような感想を伝えている。

「今度旅を共にした戦後育ちの記者たちの間から「天皇って、いい人じゃないか」という感想が聞かれた。彼らは、事実上、初めて天皇と接したのだった」

また、ご訪米は「象徴天皇」の意義を日本国民に再認識させたという、次のような指摘があった。

「それに、日本国民が戦後初めてオオミイツ（大御稜威）を思い出す機会でもあった」「戦後、われわれは「象徴天皇」という言葉に、こういってはなんだが、いわば「無味無臭」のアイマイな存在を印象づけられてきた。それがいわれてみれば、今回のご訪米の“成果”で、まぎれもない元首であることを教えられた」

## おわりに

昭和50年の天皇ご訪米という事例をもとにした前節までの考察を通して、国家及び国民統合の象徴である天皇の意義を具体的に明らかにすることができたと考えるが、なお今までの考察に関連して2、3の点を指摘しておきたい。

まず天皇のお人柄を通して、日本における道義の中心であり、国家及び国民統合の中心である天皇の意義が、君主制の伝統とは全く無縁であったアメ

リカ国民にも十分理解されたという点である。そのことは、天皇が極東アジアの日本という島国の特殊な存在にとどまらないで、世界の人々に認められる普遍的価値を持つ存在であるということを示しているのではないか。今までの考察で紹介しなかった次の2つのアメリカ人の指摘は、さらにこの点を示唆していると考えられる。

(1) 「天皇ヒロヒトは素晴らしい第一級の紳士だ。私自身は率直に言って今まで大した関心もなかったし、日本のことは専門じゃないので知らなかったが、いい知れぬ感銘を受けた。こんな立派な天皇をもった日本国民は幸せだ。政治の次元などはるかに超えた日本の精神的・道義的な価値、伝統ならびに文化を体現しておられる天皇が存在されているということ、そしてそれが継承されているということ、何千年続いているか知らないが、そのことがなぜ日本人にとって大きな誇りの源泉であるかということが、今よく理解できた」（スミソニアン研究所のある研究員の感想、天皇ご訪米当時同研究所に留学中であった若泉敬氏が紹介）

(2) 「日本という国がある限り天皇は続くだろう。ご訪米は大成功だった。今は米国人のほうが日本人より天皇制を支持してるんじゃないかな。天皇の存在なくして日本の国際的信望が高まるか。ノーでしょう。天皇なしの日本の代表はちょっと考えられない」（ジョンズ・ホプキンス大学のセイヤー教授）

次にますます国際化がすすむ中で、日本および日本国民は今後いかに諸外国とうまく友好関係を保ってゆくかが注目される場所である。この点に関して、ご訪米で示された天皇の言動から大きな示唆が得られたが、さらに次のような天皇の言動とその反響を紹介しておこう。ご訪米中に天皇がシカゴ郊外の農場を見学された時に、大豆やトウモロコシ畑をご覧になり、関係者に「これが私たちの食べている大豆やトウモロコシなんです、ありがとうございます」といって感謝されたという。これを見聞いたシカゴ・デーリー・ニューズ紙のダットマン編集担当副社長は、次のように述べている。

「もう一つわかったのは日米の相互依存だ。たとえば、米国人はみな日本

の自動車やテレビ、ラジオが米国の産業を圧迫するという警戒心を持ってきた。ところが天皇がダイズやトウモロコシ畑をご覧になって「日本人の食糧だ」といって感謝された。こんなことはシカゴにいて頭ではよくわかっているはずのことだったのだが、はじめてお互い、依存し合っていることがわかったという感じた。この共通認識は貿易だけでなく、今後の日米関係に大きく生きると思いますよ」

人間社会はお互いに依存し助けあって成り立っている。そのためにお互いに協力し感謝するという道義心が大切であることを、上記のエピソードをはじめとすご訪米中の天皇の言動は教えていると考える。

天皇はご訪米前に、米雑誌『タイム』とのインタビューで、今後の日本の歩みについて次のように述べておられる。

「[日本の歩み] いうまでもなく日本は世界の犬勢や出来事の影響から自由ではない。しかし私は日本が古い伝統のよい部分を守り続け、他の国々と協力して、世界の永続的平和の基礎を築くの役に立つよう希望している。世界は変化している。しかし私は日本が平和な国であり、良好な国際関係を築くよう努力し、また世界の敬意を受けるのに値する国家に発展してもらいたい」

日本が今後「世界の敬意を受けるのに値する国家に発展」することが大切であり、そのためには、日本の皇室の伝統となっているような普遍的な道義心を、国民があらためて見つめなおす必要があるのではあるまいか。

#### 注

(1) 本稿は、新聞・雑誌を中心に日本側の資料の範囲で考察しており、アメリカ人の見解も日本の新聞・雑誌などで紹介されたものを採用している。つまり、アメリカの新聞・雑誌など外国側の資料には直接あたっていない。

また本稿は、京都産業大学教授若泉敬氏の講演記録「アメリカから見た日本の天皇」（天皇陛下御在位50年記念特別講演集『正しい皇室観』所収、昭和52年、特別講演集編集委員会）より多くの示唆を得るとともに、その中で紹介されてい

るアメリカ人の見解などを論証の資料として大いに活用させていただいた。若泉教授には紙上をかりて深く謝意を表したい。

(2) 『毎日新聞』昭和50年9月30日夕刊。

(3) 例えば、ある退役将校(65才)は、ご訪米前の日本人記者の取材に対して、「天皇は第二次大戦の責任者だ。ルーズベルトもヒトラーもそうだが、真珠湾の奇襲は、許されることではないだろう」と語っている（『諸君』昭和50年11月号、52頁）。またアメリカの教科書では、日本が侵略戦争で真珠湾攻撃をしかけてきたんだということになっているし、天皇ご訪米当時でも毎年12月7日になると、どこかの新聞では必ず「リメンバー・パールハーバー」を取りあげるといふ（若泉敬氏の指摘、前掲書『正しい皇室観』、111～112頁）。

(4) 『朝日新聞』昭和50年9月28日朝刊社説。

(5) 前掲書『正しい皇室観』、105～106頁。この点に関しては次のような報告もあった。「日本人がヒロシマをあげれば、パール・ハーバーの不意打ちを持ち出す戦争体験派の米国人は多かったし、逆にパール・ハーバーで米国人に非難されれば、日本人はヒロシマでやり返すのが普通だったからだ。戦後長い間この二つの単語は、それぞれ両国民が相手を沈黙させる「決め手」であったし、また逆に相手の攻撃を中和させる最も有力な「防衛兵器」でもあった」（『サンケイ新聞』昭和50年9月20日朝刊）。

(6) 『朝日新聞』昭和50年10月15日朝刊社説。

(7) 『諸君』昭和50年11月号、46～55頁。

(8) 『サンケイ新聞』昭和50年9月20～24日および28日の朝刊に掲載。

(9) 『読売新聞』昭和50年9月22日夕刊。

(10) 『朝日新聞』昭和50年9月22日朝刊。

(11) 『日本経済新聞』昭和50年9月29日朝刊。

(12) 『朝日新聞』昭和50年9月25日夕刊。その他、ハーバード大学教授ライシャワー氏は、欧州などに対する関心と較べて、日本人への注意がとかく不十分になりがちだというアメリカ人の性向を述べ、「米国内を旅行される天皇のご訪問は、恐らく全国ニュースというより、ローカル・ニュース的な性格を持つことになろう」と予測している（『毎日新聞』昭和50年9月26日朝刊）。

(13) 『日本経済新聞』昭和52年5月19日朝刊の「私の履歴書」より。

- (14) 『朝日新聞』昭和50年10月19日朝刊。  
 (15) 同上。  
 (16) 入江相政著『オーロラ紀行』、読売新聞社、昭和51年、70頁。毎日グラフ増刊『天皇・皇后ヨーロッパご旅行』、昭和46年10月27日刊、28～29頁、など。  
 (17) 加瀬俊一「天皇訪米の成果」（『マスコミ文化』昭和50年12月号）。なおご訪米前の天皇とアメリカ人記者との会見において、第二次世界大戦の問題に関する質問がたびたび出たことなどで、出発前の宮内庁幹部の胸中には「正に薄水を踏む思い」もあったという（『週刊新潮』昭和50年10月23日号、124頁）。  
 (18) 『読売新聞』昭和50年9月30日朝刊社説。  
 (19) 例えば、帰国時の新聞社説でも、「天皇陛下は、出発前のだれの子想をも越えた大きな反響を各地に呼び起こして、無事、訪米旅行を終えられた」（『読売新聞』昭和50年10月15日朝刊社説）、「日米関係の緊密化という視点からみれば、象徴的な意義以上の実質的効果を伴う貴重な行事となった」（『毎日新聞』昭和50年10月15日朝刊社説）などと評価されている。  
 (20) 例えば、ご訪米後に、上智大学助教授（社会学）の高根正昭氏は、アメリカが国家的利益の立場から、天皇ご訪米を日米間の将来にとって重要な儀礼として取り上げた、と論評している（『東京新聞』昭和50年10月29日夕刊）。またご訪米前に、アメリカ側は同盟強化の象徴として政治的にとらえがちという指摘もある（『読売新聞』昭和50年9月25日夕刊）。  
 (21) 例えば、朝日新聞の随行者は、公式行事の終わった段階で、次のように報告している。「天皇に最大限の敬意を表することが日米関係に有利に作用する——というような計算ではなく、天皇ご自身のお人柄に直接ふれることにより長年の「ヒロヒト像」をぬぐい去るきっかけを与えられた米国人は、少なくともに違いない。その点、今度のご訪米は明らかに米国人のなかの「天皇責任論」を弱める働きをするだろう」（『朝日新聞』昭和50年10月4日夕刊）。  
 (22) 『日本経済新聞』昭和50年10月9日朝刊。同新聞、昭和52年5月20日朝刊「私の履歴書」。『週刊現代』昭和50年10月30日号、174頁、など。  
 (23) 例えば、次の事実もそのことを示す一例であろう。即ち、天皇ご訪米を取材する記者団に対する身分証明書500枚用意していたところが、ご到着後次第にその要求がふくれ上がり、ついに2000枚発行することになり、アメリカ側関係者も

- 予想しなかったほどの反響となったという（『読売新聞』昭和50年10月7日朝刊。『朝日新聞』昭和50年10月19日朝刊）。  
 (24) 『朝日新聞』昭和50年10月19日朝刊。  
 (25) 『読売新聞』昭和50年10月13日夕刊。  
 (26) 『正しい皇室観』、103頁。  
 (27) 『週刊現代』昭和50年10月30日号、174頁。  
 (28) 『諸君』昭和50年11月号、53頁。  
 (29) 『毎日新聞』昭和50年9月13日夕刊。  
 (30) 『日本経済新聞』昭和50年9月29日朝刊。  
 (31) 『毎日新聞』昭和50年10月3日朝刊。  
 (32) 『サンケイ新聞』昭和50年10月3日朝刊。  
 (33) 同上、昭和50年10月12日朝刊。  
 (34) 『読売新聞』昭和50年10月13日夕刊。  
 (35) 『諸君』昭和50年12月号、56頁。  
 (36) 『日本経済新聞』昭和50年10月15日朝刊。『朝日新聞』同日朝刊。なお若泉敬氏は「至難に近い歴史的課題を、陛下は完璧に解決されたのであります」と評している（『正しい皇室観』、111～113頁）。  
 (37) 『正しい皇室観』、113～116頁。  
 (38) 『毎日新聞』昭和50年9月22日夕刊。  
 (39) 『朝日新聞』昭和50年9月23日朝刊。  
 (40) 同上、昭和50年10月19日朝刊。  
 (41) 『正しい皇室観』、104～105、111～116頁。  
 (42) 『朝日新聞』昭和50年9月22日朝刊。またご訪米前に、ワシントン・ポスト紙の記者ジョン・サー氏は、「われわれの目から見れば、天皇は戦争の前から存在し、戦後もまだ存在していると映り、特に40歳以上の米国人に印象深くとらえられている。その意味で、天皇を知らない世代に与える訪米の影響は大きいと思う。そして公式的には、戦後処理はこれで終わったということになり、日米関係は大きな転機を迎えることになるだろう」と述べている（『日本経済新聞』昭和50年9月29日朝刊）。  
 (43) 昭和50年10月3日付各新聞夕刊。

- 44) 加瀬俊一「天皇訪米の成果」。なお若泉氏は、戦争のことは不十分でも言いすぎてもいけない。触れ方がデリケートな問題であったが、天皇はアメリカに対する感謝の気持ちを述べられ、そのいわば枕言葉として戦争ということに言及されたわけで、「必要にして十分なことを最も適切に表現された」と評している（『正しい皇室観』、116～117頁）。
- 45) 『朝日新聞』昭和50年10月19日朝刊。
- 46) 戦後のアメリカの援助に関しても、ご訪米直前の5大新聞の社説の中では、毎日新聞が言及しているにすぎなかった。
- 47) 『正しい皇室観』、121～123頁。『週刊現代』昭和50年10月30日号、176頁。
- 48) 『朝日新聞』昭和50年10月4日朝刊。
- 49) 『正しい皇室観』、118～119頁。『朝日新聞』昭和50年10月19朝刊。入江相政著『オーロラ紀行』、203頁、など。
- 50) 『正しい皇室観』、119頁。『サンケイ新聞』昭和50年10月13日朝刊。
- 51) 『正しい皇室観』、118頁。
- 52) アメリカ人記者たちも、口をそろえて「いいスピーチだ」と感動をかくさなかったという（『朝日新聞』昭和50年10月4日朝刊）。また若泉敬氏は「アメリカ国民の胸に何かジーンとくるものが確かにあったんですね」と述べている（『正しい皇室観』、117頁）。
- 53) 『サンケイ新聞』昭和50年10月12日朝刊。
- 54) 『正しい皇室観』、106～108頁。
- 55) 同上、106頁。本節の始めに紹介したエドワード・ケネディ上院議員の記事も参照。
- 56) 『朝日新聞』昭和50年9月20日朝刊。『読売新聞』昭和50年9月3日夕刊、など。ところで、昭和46年のヨーロッパ7か国歴訪のあとの記者会見で、「どこの国が印象深かったですか」と聞かれて、天皇は「それは比較になるから言えない」とお答えになった。このように、特定の対象に格別の感情を示すことを、自ら極めて厳格に禁じてこられた天皇が、アメリカに対してだけは、これまでも率直に好意と感謝を口にし続けてこられた。それからみても、アメリカに対する天皇の思いの深さを知ることができよう（『朝日新聞』昭和50年10月4日朝刊）。
- 57) 『サンケイ新聞』昭和50年10月4日朝刊。

- 58) 昭和54年8月20日付各新聞朝刊。
- 59) 『読売新聞』昭和54年8月20日朝刊。
- 60) 同上。
- 61) 由利静夫外編『天皇語録』、講談社、1974年、236頁。
- 62) 『朝日新聞』昭和54年8月30日朝刊。なおこの『朝日新聞』の記事は、終戦後の幣原内閣の時に農相をつとめた松村謙三氏（故人）の自伝『三代回顧録』（昭和39年刊）によるとある。  
なおまた昭和54年8月29日の宮内庁記者との会見で、天皇ご自身もこの件について「そういうことがあったのは事実です」と述べておられる（『朝日新聞』同日条）。
- 63) 『読売新聞』昭和54年8月20日朝刊、など。
- 64) 『毎日新聞』昭和54年8月20日朝刊、など。
- 65) 『サンケイ新聞』昭和50年8月15日朝刊。なおこれを通して、マッカーサー元帥が食糧輸入に努力している様子もうかがわれる。
- 66) 『天皇語録』、266頁。
- 67) 「(前略) 戦後歴代の大統領ならびに米国政府および市民がわが国の復興および建設に対し物心両面において多大の援助を与えられたことは、日本国民とともにわたくしの忘れ得ないところであります。この機会に心からの謝意を表明する次第であります。(後略)」(『天皇語録』、344頁)。
- 68) 『天皇語録』、216～219頁。『朝日新聞』昭和50年9月20日朝刊。
- 69) 『朝日新聞』昭和50年9月20日朝刊。
- 70) 『天皇語録』、219頁。
- 71) 『朝日新聞』昭和50年9月20日朝刊。
- 72) 同上、昭和50年10月15日朝刊。
- 73) 『サンケイ新聞』昭和50年10月17日朝刊。
- 74) 『日本経済新聞』昭和50年10月15日朝刊。
- 75) 同上、昭和50年10月9日朝刊。
- 76) 同上、昭和52年5月20日朝刊「私の履歴書」より。
- 77) 入江侍従長がこの点に関する話しを次のように紹介している（同上、昭和52年5月21日朝刊「私の履歴書」より）。

「昨年の暮れのこと、アメリカのABC放送の人が、次のようなことを言った。

アメリカには、世界各国から、国賓や、国賓級の要人たちが、ひっきりなしに  
来訪する。その時は、みんな歓迎するが、かえってしまえば、それまでのもの。  
そんなこと、すぐもう忘れてしまう。それなのに、日本の天皇陛下だけは、全く  
例外で、一年以上経った今日になっても、アメリカの各家庭で、しばしばこうい  
う会話がかわされる。「日本の、あの心のやさしいおじいさんは、今、一体なに  
をしているだろう」と。アメリカ人の心に、こんなにも長く、こんなにも強く、  
その印象を植えつけた人はいない。ご訪米ということは、陛下にとっても、日本  
の国にとっても、大変な成功だったと」

78 『週刊新潮』昭和50年10月23日号。

79 中村勝範著『欧米からみた日本』、新有堂、昭和52年、82頁。

80 『朝日新聞』昭和50年10月14日夕刊。

81 『週刊新潮』昭和50年10月23日号。

82 林健太郎著『歴史の精神』、実業之日本社、昭和53年、151頁。

83 『正しい皇室観』、127～128頁。

84 『サンデー毎日』昭和51年3月14日号。

85 『サンケイ新聞』昭和50年10月13日朝刊。

86 同上、昭和50年10月12日朝刊。

87 『日本経済新聞』昭和50年9月29日夕刊。